

1960年代の東京教育大学附属駒場中・高等学校図書館

—図書委員会発行『図書館ニュース』『図書館報』を中心に—

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

澤田 英輔

1960年代の東京教育大学附属駒場中・高等学校図書館

—図書委員会発行『図書館ニュース』『図書館報』を中心に—

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

澤田 英輔

要約

本校がまだ「東京教育大学附属駒場中学校・高等学校」だった 1960 年代、図書委員会生徒が広報紙『図書館ニュース』『図書館報』を発行していた。2012 年 12 月の書庫整理の際にその残部が発見されたので、それをもとに、50 年前の学校図書館運営の一つのケースとして、当時の本校図書館の実態を検討した。

キーワード：学校図書館 東京教育大学附属駒場中・高等学校 図書委員会

1 はじめに

1.1 本稿の目的

本校では現在、筑波大学と連携した「トップリーダー育成のための教育の高度情報化事業」が 2012 年度から三年間の予定で開始されている。その事業の一部として専門資格を持つ司書の任期つき雇用が実現し、学校図書館の整備を進めている。

そのような中、2012 年 12 月の書庫整理中に 1960 年代の東京教育大学附属駒場中学校・高等学校（以下「本校」）の図書館についての資料が発見された。当時の生徒が発行していた広報紙である。もう 50 年ほど前の記録ではあるが、これをもとに当時の本校図書館の実態をここに整理し、記録しておくことは、今後の本校の図書館運営を考える上で参考になると思われる。

また、生徒委員会が作成する広報紙には、学校の公式記録には残りにくい生徒の実感や、学校が公表したくない情報も含まれるため、学校図書館史を考える上で有益なケース報告ともなるはずである。

そのような点を考え、当時の図書委員会報を主な材料にしながら、1960 年代の本校図書館の実態を整理して公表しておくことにした。

1.2 今回の資料について

今回、書庫から見つかった『図書館ニュース』『図書館報』は以下の通りである。『図書館ニュース』は東京教育大学附属駒場中学校、『図書館報』は同高校の図書

委員会発行となっており、それぞれ 19 号（19 号が 2 号あるので実質 20 号）、10 号で休刊となった¹。以下、本稿で『図書館ニュース』『図書館報』を出典とする場合は、読者の便に配慮して、引用註によらず【】内の略称を用いて表記する。なお、『図書館ニュース』10 号（N10）と 11 号（N11）には、通算での号数が書いていないため、発行間隔から見ておそらくこの号数であろうという推定値になっている。

<図書館ニュース（中学図書委員会発行）>

『図書館ニュース』1 号	（1961 年 12 月）	【N01】
『図書館ニュース』2 号	（1962 年 7 月）	【N02】
『図書館ニュース』3 号	（1962 年 12 月）	【N03】
『図書館ニュース』4 号	（1963 年 3 月）	【N04】
『図書館ニュース』5 号	（1963 年 7 月）	【N05】
『図書館ニュース』6 号	（1964 年 3 月）	【N06】
『図書館ニュース』7 号	（1964 年 7 月）	【N07】
『図書館ニュース』8 号	（1964 年 12 月）	【N08】
『図書館ニュース』10 号	（1965 年 7 月）	【N10】
『図書館ニュース』11 号	（1965 年 9 月）	【N11】
『図書館ニュース』13 号	（1966 年 7 月）	【N13】
『図書館ニュース』14 号	（1967 年 7 月）	【N14】
『図書館ニュース』15 号	（1968 年 7 月）	【N15】
『図書館ニュース』16 号	（1969 年 3 月）	【N16】
『図書館ニュース』17 号	（1969 年 7 月）	【N17】
『図書館ニュース』18 号	（1970 年 3 月）	【N18】
『図書館ニュース』19 号	（1970 年 7 月）	【N19】
『図書館ニュース』20 号	（1971 年 3 月）	【N20】

<図書館報（高校図書委員会発行）>

『図書館報』1号	（1963年12月）	【H01】
『図書館報』2号	（1964年3月）	【H02】
『図書館報』3号	（1964年7月）	【H03】
『図書館報』4号	（1965年3月）	【H04】
『図書館報』5号	（1966年7月）	【H05】
（第6号、第7号は欠）		
『図書館報』8号	（1969年3月）	【H08】
『図書館報』9号	（1970年3月）	【H09】
『図書館報』10号	（1970年7月）	【H10】

これらの資料に加えて、『図書館案内（昭和61年度版）』『創立二十周年記念誌』『創立三十周年記念誌』『創立四十周年記念誌』などから総合して知り得た本校図書館の沿革を、末尾の表1に掲げておく。本文とあわせて参照されたい。

1947年に開校と同時に設置された本校図書館は、その後、生徒数の増加に対応するように急ピッチで蔵書冊数を増やしながら、1963～64年にかけて新校舎（3号館・5号館）に移転した。そのような転機の時期の本校の学校図書館はどのような実態だったのだろうか。以下、蔵書冊数、蔵書の傾向、利用の傾向などを調べてみた。

2 本校図書館の概況

2.1 蔵書冊数の推移

『図書館ニュース』『図書館報』では、折にふれ蔵書冊数にも触れられている。これは公式の記録ではないとはいえ、司書の情報提供もあるのだろうし、概況としてはある程度信頼して良い。それによると、本校図書館の蔵書冊数は、1962年の時点で10350冊（N02）、その後、1963年約12000冊（H01）、1968年には単行本等14813冊＋文庫新書約800冊で約15600冊（H08）と順調に増加している。実際には後述するような延滞や無断持ち出しの問題もあり、これが全て書棚に並んだわけではないようだが、少なくとも記録上はこのように推移している。

また1960年以前の蔵書冊数については、当時教員だった丸尾芳男（敬称略、以下同）の回顧がある。それによれば、1947年の創立当時は図書室に本が一冊もなかったため、「リュックをしょって、神田の古本屋さんを歩きまわって、少しずつ買い揃えていった」という（N01）。そのような努力の結果、1950年には1500冊、53年3000冊、54年3700冊、55年4500冊と増

加していったようだ（H01）。57年11月には創立10周年を記念してPTAから新潮文庫が寄贈され、それを機に貸し出しを「ブックカード」形式で始めたのだが、その時には6700冊の蔵書があったという²。

つまり、57年（6700冊）から68年（15600冊）の間、年平均800冊を超える受入数があったことになる。1950～60年代、本校は総クラス数が増加する時期にあたっており（表1参照）、1967年によく現行と同じ中学3クラス3学年・高校4クラス3学年の合計生徒数約840名の体制ができるのだが、その生徒増を見込んで積極的に蔵書を増やしたのだと思われる。

2.2 図書館運営体制

では、そのような蔵書数の増加は、どのような体制で支えられたのだろうか。当時の図書購入予算の詳細は不明だが、少なくとも1964年の時点では、中高あわせて40万円あったようだ（N06）。これとは別に1966年には創立20周年事業の一環として、図書費とは別に理科系の本を中心に100万円の予算が割り振られたこともある（H05）。創立10周年事業での新潮文庫寄贈と同様、蔵書増にはPTAの援助も大きかったことがわかる。

また、図書館の運営スタッフとしては、本校教員が分掌として受け持つ図書係の他、司書が1名常駐していた（任期は表1参照）。ただし、62年4月に都立京橋商業高校の司書教諭として転任した古郡氏（N04）は別として、他の常駐スタッフが「司書」または「司書教諭」の資格所持者だったのかは不明である³。いずれの司書も、着任時の生徒向けの自己紹介を読む限り司書資格を所持していることはうかがえないが（N05、N07、N11、N19、H01、H03、H08）、そういうことは生徒向け広報にわざわざ記さないことも多いのも事実だろう。ただ、一年から最長でも三年という短い期間で司書が入れ替わっているのも、仮に資格保持者だったにせよ、仕事に慣れた頃に退職している状況である。長期的な視野にたった図書館運営は難しかったものと思われる。

そして、その他に図書委員会が各クラス2名ずつ選出され、貸出業務をはじめ、他校図書館訪問や、文化祭で読書調査の結果を発表するなどの委員会活動を行っていた。しかし、年度によって意欲の差はあれ、活動の様子は概して積極的とは言えなかったようだ。特に1952年に設置された高校図書委員会の生徒は、1957年に貸出が開始されて以降「段々協力をサボるようになり、自分の当番の日は意識的に失念する者が出

てきた」ために有名無実となり、1960年にはいったん庶務委員会に吸収され、1963年の新図書館竣工にあわせて復活するという経緯をたどっている（H01）。

2.3 他校との比較

以上の状況を、当時の一般的水準と比較してみよう。

まず、1959年に文部省が定めた「学校図書館基準」では、学校図書館が満たすべき基準として、

- ①生徒一人あたり5冊以上
- ②人件費・特別施設費・視聴覚資料費をふくまない通常経費として、児童生徒一人あたり小学校250円以上、中学校350円以上、高校450円以上
- ③一年間の受け入れ冊数では生徒一人あたり0.5冊以上

を示しているが、本校の場合は①約18冊、②基準額34万2000円に対して図書購入費40万円、③生徒一人あたり0.95冊となっており、いずれの基準もクリアしている。

また、スタッフの面も含めた当時の学校図書館の一般的な状況を知る上では、全国学校図書館協議会が調査し、『学校図書館』1960年11月号で公表した「司書教諭と学校司書の実態」が非常に参考になる。これは、全国の小中高合計約4万校に質問紙を送り、約3万校から回答を得た大規模調査である。

それによると、小中高の校種の中では一番恵まれている高校でも、

- ・蔵書冊数が5000冊を超える高校…47.6%
- ・蔵書冊数が8000冊を超える高校…25%
- ・資料購入費の平均…28万5251円
(うち公費は平均3万2318円にすぎず、PTA負担金による運営が多い)
- ・司書の配置率…63%
- ・司書の有資格者率…28%
(事務員や実習助手が図書館を担当するケースが多い)

という結果になっており⁴、本校の状況は蔵書や予算の面では全国水準では上位に入っていることがわかる。また、本校の司書が無資格の事務員だったとしても、当時としてはむしろそれが普通であったこともわかる。全国的には、配置されているだけでも「まし」という状況だったのである。

さらに、図書委員会の生徒が他校図書館を訪問した

際に聞き取った、他校の蔵書冊数・予算の記録も参考にしよう（表2を参照）。それを見ても、私立はともかく、少なくとも他の国立校や公立校と比べて本校図書館の冊数が見劣りしていたことはないようだ。生徒一人あたりの冊数にしても、跡見女子学園の8冊（H04）や麴町中学校の4冊（N10）に比べれば、相当恵まれている。図書購入予算も、たとえば同じ国立のお茶の水女子大附属の場合、中学で17万円（N04）、高校で27万円（H05）であるから、単純に合計すると44万円となり、中高共有の図書館である本校の40万円とほぼ同等である。私立学校では日本女子大附属中が21万円（N06）、実践女子学園が100万円（N08）、立教女学院高校が62万円（H04）などの図書購入予算を持っていたようだが、生徒数の違いも考慮すると（実践女子学園は3000人の生徒がいるので、生徒一人当たりの予算だと本校の方が多い）、本校図書館は予算面でも一定の基準を確保できていたことが実感される。

以上のように、全国の公立校や交流のあった都内の国私立校と比較しても、本校の図書館が、少なくとも予算や冊数の面で見劣りしなかったことは明らかであろう。

2.4 選書の傾向

では、本校図書館では、具体的にどのような本が購入されていたのだろうか。黎明期の本校図書館を支えた丸尾の回想をふたたび引用する。

その時の基本方針は、戦後のキワモノではなくて、戦前のもので、恒久的価値のあるものをまず揃えようと思った。娯楽的な読物類は個人でも買えるから、ボリュームの多い基本的な叢書類・百科事典等一個人で買えないものを中心にそろえた。図書室は、勉強のための資料室というのが、学校図書館の本来の使命だからね。（N01）

「娯楽的な読物類」を排して「ボリュームの多い基本的な叢書類」を中心に揃えた結果として、本校の図書館には全集ものを中心に、古典的名作と呼ばれる本が多く並んでいたようだ。1962年時点で全136種類の全集があり、「書架にでている本の五分の三以上が全集」（N03）という様子であった。「中・高校生にはもったいないような貴重な図書が沢山ある」「手軽な読物類は伝統的に少いが、学問的価値のあるものが充実している点では、都内有数といってもいいだろう」（N01）、「とにかく、こんなに全集のある、学校図書館は、他

に類がないであろう」(N03)という発言には、全集中心の図書館であることを誇る意識が露わである。

ただし、この背景には、当時の一般的な読書傾向があったことも理解しておく必要がある。当時の『週刊読書人』編集者の長岡光郎によると、戦後だけで1949年、1952年、1958年、1959年、そして1966年と五次にわたって全集のブームがおきていた⁵。一般家庭でも重厚な文学全集が本棚にあることがそう珍しくなかった時代なのである。読まれる文学作品の傾向も、今とはだいぶ異なっていた。毎日新聞の読書世論調査では、「良いと思った本」のアンケート調査で60年代を通じてマーガレット・ミッチェル『風とともに去りぬ』やパール・バック『大地』などが常に上位を占めていたし、夏目漱石・武者小路実篤・トルストイなども数度ベスト10にランクインしている⁶。滋賀県のある学校では高校1年生の時点でおおよそ半数の生徒が『山椒大夫』『吾輩は猫である』『路傍の石』を読んでいるという調査結果もある⁷。さらに、学校司書や司書教諭向けの雑誌『学校図書館』1966年4月号でも、図書館における全集の扱いが特集され、著者名順の各全集索引まで掲載されている。当時の学校図書館にとって、文学全集は無視できない存在だったのである。

つまり、本校の蔵書傾向も、決して時代の風潮から外れたものではなかったのだ。とはいえ、当時交流のあった他の学校図書館、例えば「文学全集はごく少ない」慶応中等部(N03)、「探偵もの、SFものなどの本が相当数」ある成城学園(N07)、「ベストセラーのような図書がある」実践女子中学(N08)などに比べると、本校の蔵書構成が全集に偏っており、それが特徴的だったこともまた間違いない。

選書に際しては、生徒による購入希望も受け付けてはいたが、その基準は厳しかった。文庫本は「取扱不便」(おそらく無断持ち出ししやすいためであろう)を理由に却下されているし(N05)、今では「現代の古典」扱いのフランクフル『夜と霧』でさえ「この類のベストセラー一本は、限られた範囲の予算の中では、どうしても文学・学問的内容の物が優先するため、ほとんどないわけである」と却下されている(N04)。

また、この購入希望は1965年の時点ではその存在自体が生徒にあまり知られておらず(N11)、さらに高校ではリクエスト本の購入に際して学校側が「評価がある程度確定しているものに限る」「装丁がしっかりしているものに限る」「娯楽本位に徹している物は不可」という三つの約束を委員会にとりつけているなど

(H09)、そもそも生徒リクエストに積極的ではなかった学校側の姿勢もうかがえる。

以上を踏まえると、本校の蔵書構成は、基本的にはほぼ教員集団の意向が反映された蔵書構成だったのだろう。そして広報紙を見る限りは、選書の権限も司書ではなく一般の教員にあったようだ。結果として、教員からすると満足度の高い蔵書構成になったはずだが、それでも一部の、例えば社会科の教員からは「戦前発行された書物の良いものが、当然ながらすくない」「揃本、全集等に大きな不足が目立つ。外国出版物(洋書)もすくない」(H03、カッコ内原註)などと、物足りなさ指摘する声があった。もっとも、一方では理系の教員にとっては「図書室には時代遅れの感のある書物が並べてあって何とかせねばならぬ」(H02)という逆の方面からの要望もあるから、担当教科によっても、蔵書構成への評価は異なったのだろう。

なお、この全集の多さと同時に本校の特徴とも言えそうなのが、1963年の時点で中高あわせて40誌あったという購読雑誌の多さである(H01)。これは、当時の東京の私立中高の平均雑誌数23誌の、ほぼ倍にあたる数値である⁸。雑誌が「ほんのわずかな学芸大附属世田谷中(N04)、「8種類」の立教女学院(H04)などを訪問する時、図書委員会の生徒も自校の雑誌の多さを実感したのではないだろうか。ただし、この雑誌は管理の難しさが問題だったようで(詳しくは後述)、1967年度には31誌(H08)、翌68年度には29誌(N15)と、急速に減少傾向を辿って行くことになる。

3 新図書館の完成

3.1 新図書館の完成まで

1960年代の本校図書館を語る上で欠かせないのが、1963～64年にかけての新図書館の完成である。

1947年の本校創立当初、中学校校舎の中の合併教室を使用していた本校図書館は、1955年には、学級増加にともなう中学校校舎の改造のため、グラウンド北側の高校校舎の一室へ移されていた⁹。当時の様子は、

新図書室は、広さは倍増したが、部屋の中央に柱を利用して高い書架が作られたので、風通しが悪かった。その上、二階が教室であったので、生徒が騒ぐと軍隊時代に積った埃が降ってきたし、掃除の際の水が漏ってくるのも再々であった。しかし、部屋が昇降口で隔離されたようになっていたため、生徒は気軽に入室できたらしく、毎日百人

ぐらいの利用者がいた。中には雑談のために入室する者もいて、司書の悩みの種ではあった¹⁰。

と、回想されている。

その図書館が、1963～64 年にかけて、中高教室の新校舎への移転にともない、現在 3 号館・5 号館と呼ばれる建物のそれぞれの三階に移された¹¹。この移転は一度に行われたのではなく、まず 1963 年 5 月に第一期工事が終了して 3 号館の 335・336 室が高校図書館（中学生も使用でき、第一閲覧室と呼ばれることもあった。本稿では「第一閲覧室」と記す）として完成し、次いで翌 64 年 6 月に第二期工事が終わって 5 号館の 531・532 室が中学図書館（第二閲覧室とも呼ばれており、本稿でもそう記す）として開かれた¹²。

この図書館は、生徒にとっても待望の新図書館だったようだ。『図書館ニュース』でも完成の前年から「新図書室はいつ出来る？」（N01）「新図書館の構想」（N03）と題して、時期や完成時の図面などを掲載し、図書館（第一閲覧室）完成後には「新図書館展望」という写真入りの記事を乗せているほどである（末尾図 4 を参照）¹³。

3.2 新図書館の広さ

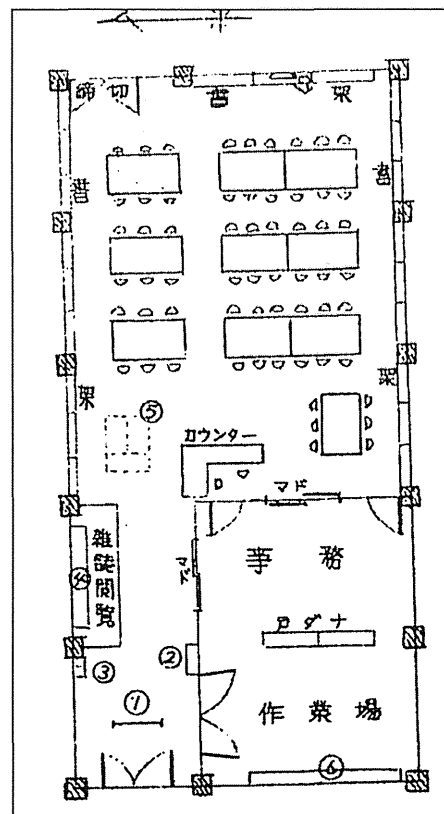
1963 年に先行して開いた第一閲覧室の広さは、閲覧室が 128.30 m²、司書室が 48.60 m²だった。これは、従来の図書館に比べ「一倍半」、おおよそ「二教室半」（N03）の大きさで、閲覧席には生徒を 65 名収容できた¹⁴。当時の調査によると、全国の高校図書館の 39.7% が 85 m²～198 m²の広さを持っていたが¹⁵、本校の新図書館は第一閲覧室だけでその水準を満たしていた。そして翌 1964 年には、本校図書館は第二閲覧室（205.30 m²）を加えて全体で 371.70 m²の広さになったのだが、200 m²以上の図書館は、当時、高校では 26.8%、中学ではわずか 2.6% しかなかったのである。新図書館は、全国的な水準で見ても、相当広い図書館だったのだ。

交流のあった他校図書館と比べても、本校の新図書館よりも明らかに広い図書館は、中高大と共通の図書館を使っていた武蔵中学校を例外とすれば（N07）、400 m²の広さがある青山学院高等部図書館くらいである（H03）。他の学校図書館の広さに対する図書委員会生徒の反応で、「我校と比べると一回りせまい」（日本女子大学附属中学校、N06）、「我校の約半分」（成城学園中学校、N07）、「我校の図書室の一部屋分くらい大きさ」（実践女子学園中学校、N08）、「広さはあまり

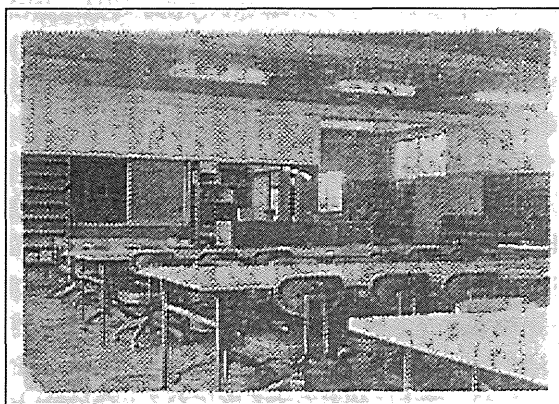
広くなく、むしろ狭いほう」（立教女学院、H04）といった感想が相次ぐのも、もっともなことであった。

3.3 新図書館のレイアウト

広い新図書館のレイアウトはどのようなものだったのだろうか。第一閲覧室の完成予定の見取り図（図 1）や写真（図 2）を見ると、中央に大きな机が並び、壁際に本棚が配置されている。これは当時の図書館としてはきわめてオーソドックスなレイアウトだったと言ってよい¹⁶。この閲覧室には、「主に文学関係の本を置く。したがって主に読書をする室になる」（N06）という用途が期待されていた。



【図 1】 第一閲覧室見取り図（予定）
（N03「新図書館の構想」より）



【図2】 完成した第一閲覧室
(N05「新図書館展望」より)

翌 1964 年に完成する第二閲覧室は、「中学とか高校の区別は全然なく」「文学以外の本を置く。したがって、主に学習をする室になる」(N06) ものとされた。

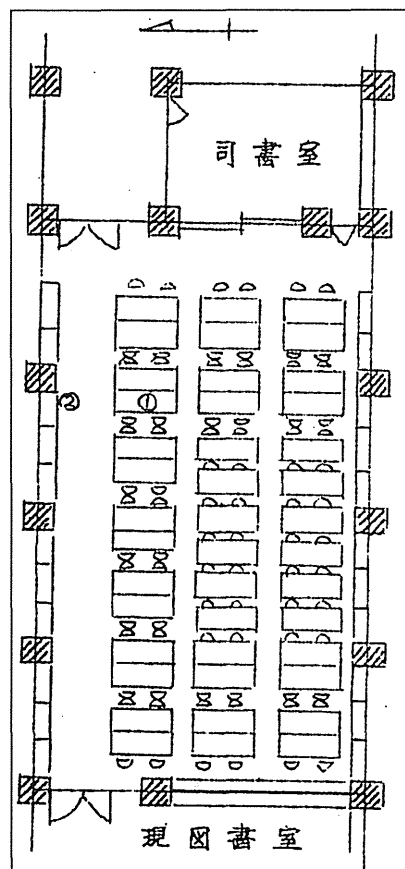
つまり、「高校図書室」「中学図書室」という呼び名はあっても、双方とも利用でき、閲覧室ごとに「読書室」「学習室」と用途をわけることが考えられていたのである。新校舎移転前からの「雑談のために入室する者」という「悩みの種」を解決するために、このような機能分化をはかったのであろう。第二閲覧室のレイアウトは右のようになっているが、それを見ても、この部屋が自習室的な色彩が強いことがうかがえる(図3参照)。

このような設計のもと、本校の新図書館は 1963～64 年にかけて完成した。この頃には蔵書 12000 冊、購読雑誌 40 種をかぞえ、図書購入予算も高額とは言えないまでも、40 万円を確保していた。もちろん上には上があるだろうが、全国の中学・高校の水準から考えれば、恵まれた状況にあったのである。

第一閲覧室完成時の、次のような図書委員会生徒の言葉は、今後への期待に満ちあふれている。

駒場のほこりである図書館に、駒場らしい新鮮な館風を育て、ほんとうの意味での駒場の自慢となるような図書館を造りあげようではないか。(N05)

では、この新図書館はどのように育っていったのだろうか。次に、新図書館完成後の生徒の利用状況を見てみよう。



【図3】 第二閲覧室見取り図(予定)
(N06「新図書館の構想」より)

4 新図書館の利用状況

4.1 貸出冊数の停滞

一般に、図書館の利用状況の大きな目安になるのが、貸出冊数の記録である。『図書館ニュース』『図書館報』でも時折貸出冊数や利用状況の調査結果を公表しているのだが、調査期間やその単位(一日あたりの記録か、一月の累計なのか)、調査対象(中高両方か、中学生のみか)などが統一されておらず、正式な開館日数がわからない現在となつては、なかなかきちんとした統計結果は算出しがたい。

そこで、あくまで便宜的にはあるが、開館日数を記載していない調査結果については、「一ヶ月を四週間、一週間を五日間」として、一日あたりの貸出冊数の参考値を算出することにした。(当時は土曜日でも学校は開いているが、午前中のみ開館ということもあり、一週間を週五日として扱った)。

そうやって計算した「貸出冊数参考値」は以下の通

りである。正確な数値ではないが、あくまで推移を見るだけなら参考になるだろう。

1962 年〔調査月不明、7 月公表〕(N02)
中学 17 冊、高校 10 冊

1963 年〔前年 4 月～1 月の平均値〕(N04)
中学 16 冊

【1963 年 6 月 第一閲覧室完成】

1963 年〔6 月 18 日から 3 週間〕(N05)
中学のみ 20.1 冊

1964 年〔調査期間不明、3 月公表〕(N06)
中学 24.4 冊
高校 17.5 冊
中高合計 41.9 冊

【1964 年 6 月 第二閲覧室完成】

1964 年〔6 月 8 日〕(H03)
高校 22 冊

1964 年〔11 月 16～21 日〕(N08)
中学 17.6 冊

1965 年〔6 月 1 日～7 月 13 日〕(N09)
中学 10.6 冊

1965 年〔9 月 2 日～9 月 20 日〕(N11)
中学 14.7 冊

【1966 年 4 月 第二閲覧室の使用停止】(後述)

1966 年〔4 月 12 日～6 月 15 日〕(N13)
中学 6.8 冊

1967 年〔調査時期不明、7 月公表〕(N14)
中学 12 冊

調査が頻繁に行われている中学生だけに注目してみよう。すると、1962 年度は 15 冊強だった平均貸出冊数参考値が、63 年の新図書館（第一閲覧室）開館とともに一時的に 20 冊を超えたものの、第二閲覧室が開いた 64 年には早くも従来の水準に戻り、65 年以降は 15 冊以下、時には一日 10 冊を割り込んでしまう。新図書館開館で貸出が活性化するどころか、かえって以前の水準を下回ってしまうのである。付け加えると、この時期は 1965 年より中学が一学級増加となり、66 年、67 年と、毎年中学生総数が増加する中での下降傾向なので、数値の印象以上に、本が借りられなくなっていたのだ。

新図書館開館当初は「新図書館に移ったせいか、前回より平均二倍近くになっているのは喜ばしい」(N06) と貸出冊数増を喜んでいて図書委員会も、その後の意外な停滞に、「利用者数に比べて余りに貸り

てゆく本が少なく、少々驚きました」(1964 年、H03)、「図書館は利用されているようにみえますが、案外利用されていません」(1964 年、N08) と、戸惑いの声をあげている。

この退潮は、60 年代後半に入ると、よりはっきりしてくる。1967 年になると、「4 月～5 月の二ヶ月で、借りた本の数 0 冊」の中学生が半数以上となり(N14)、6 月末の段階でも、一度も借りたことのない生徒が 100 名以上、「図書館を利用したことがない」生徒が 20 名以上いるという事態になるのである(N15)。

4.2 「談話室」化と第二閲覧室の利用中止

貸出冊数の減少と並行して問題になっていくのが、図書館の「談話室」化である¹⁷。前述したように、新図書館に移る前から図書館内の騒音は問題視されており、蔵書の「学問的価値」に自負のある教員の中には「宝の山にはいりながらガヤガヤ騒いでいるばかりで、その価値を認識しない者が多いのはなげかわしい」(N01) と嘆く者もいた。そこで、新図書館では、第一閲覧室を読書室、第二閲覧室を学習室とする機能別の分室が意図されていたのである。

ところが、結果だけ見ると、その意図は必ずしもうまく機能しなかったようだ。というのも、開室わずか 2 年も満たない 1966 年 4 月、第二閲覧室が利用中止となり、図書館の機能は第一閲覧室のみに限定されてしまうのである。

『図書館案内』の沿革では「学校運営の都合により」¹⁸と簡潔に記されているこの事情は、『図書館ニュース』13 号、『図書館報』5 号の、図書係教員による「閲覧室模様替えの弁」を読むと、はっきりする。

それによると、中止理由の第一は、これまで『図書館』としての雰囲気^{アツモリ}が欠^ツけていた^ツために「係の手が届くように」「管理の徹底をはかる」ことだった。広さは倍になっても常駐する司書は一人である。ドア一つで繋がっているとはいえ、空間が二つに分かれている以上、第一閲覧室に作業場がある司書の目が、第二閲覧室に届かなくなるのは、当然のなりゆきだっただろう。おそらく、司書の目の届きにくい第二閲覧室は、時に相当うるさくなったのではないだろうか。

また第二の理由としては、「視聴覚室や小講堂がない」当時の本校において、「映画や PTA 主催の催し物などには、勢い第二閲覧室が利用される」ことが多く、その都度閲覧室としての機能が停止していた実情があげられている。第二閲覧室にある本を閲覧したくとも、

第二閲覧室が別目的で使用されていると、それもできないのである。それだと図書館利用者にとってもかえって不便なので、第一閲覧室に閲覧室機能を集中させる狙いもあった（N13、H05）。

当時の本校では、生徒がくつろぐ空間や、一定以上の人数を収容できる小講堂的な空間がなかった。したがって、生徒の図書館利用の実態も、「時間をもてあまし、『ちょっと図書館へ行って雑誌でものぞいてこよう』といった調子で、ブラリとやってくる人が案外多く」（N07）、特に昼休みは、100 人を超える生徒が出入りするため、「3、40 分の間にこれだけの人数が出入りするので、勢いさわがしくなる」（H03）面があった。当初は「学習室」として作られた第二閲覧室も、第一閲覧室との機能分離に失敗し、保護者の会合などでも使われるようになって、結局は管理の行き届かない談話室的な空間になってしまったようだ。中止と同時に図書委員会より「図書館内での飲食および大声でさわぐこと」（N13）の禁止が通達されていることを見ても、生徒の騒音が問題視されていたことがわかる。

こうして第二閲覧室は利用中止となったが¹⁹、その後も騒音の問題は解決しなかった。生徒の話し声については司書から何度か苦言が呈されるも改善の気配がなく、1972 年、当時の教員だった多田逸郎が、ユーモアを交えつつも次のように嘆くありさまだったのである。

わが駒場のそれ[図書館]はまさしく談話室であり、田舎の駅の待合室のそれである。西部劇に出てくるあの酒場の喧噪がそこにある。その西部劇の影響か、足を机の上や本棚に乗せている輩も稀ではない。

〔カッコ内は引用者〕（N20）

4.3 延滞と無断持ち出しの頻発

1960 年代後半の新図書館には、談話室化以上に深刻な問題があった。それは、本の無断持ち出し（盗難）の横行である。

これも騒音と同様、以前からその萌芽はあった。新図書館に移る前の 1962 年の時点で、貸出冊数の三分の二が延滞している事実が報告されている（N02）。当時の貸出期限は 5 日間（1 冊まで）で、期間が短すぎる印象を受けるが、表 2 を見てもわかるように、当時、一週間の期限というのは珍しいことではなかった。この延滞の多さは、新図書館にもそのまま引き継がれたようで、第一閲覧室の開館後の 1964 年 3 月には「貸出した本のうち半数は期限内に返ってこない」（N06）

と、貸出期間の遵守を呼びかけている。

この状況を受けて、第二閲覧室が完成した 1964 年 6 月、図書委員会は同時に「個人カード」方式による貸出の開始に踏み切った。これは、従来から用いていた「ブックカード」に加え、生徒が「個人カード」を持ち、本の貸出中はその生徒の「個人カード」を図書館が保存することで、借りた本を返却するまでは次の本を借りられなくする仕組みである（N07）。一人で数冊も借りたり、延滞したりするのを防ぐ狙いで、当時多くの学校で採用されていた方法らしい（H03）。

ところが、この方式が奏功しなかったようである。まず、この新方式に生徒が慣れず、『図書館利用の手引き』だけでなく、広報での周知も必要であった（N07、H03）。それでも従来のブックカードのみの方式より面倒なので、「そんな制度がわざわざいしたのか、このごろ図書館及び本の利用度が、低下したように思われる」（H03）という声もあった（実際に、第二閲覧室完成後から、貸出冊数は減少傾向になる）。また、延滞すると自分が借りられなくなるので、他人の個人カードを大量に集める生徒も現れた（H03）。1965 年には図書委員会から生徒に延滞をやめるよう呼びかけが行われているので（N11）、結局はこの方式も、延滞防止の決定的な解決にはならなかったようだ。

そして、おそらくはこの延滞の延長線上に、本の無断持ち出しも問題化していく。1965 年には、訪問先の跡見女子学園で本の紛失が年間 10 冊であることを聞いた生徒が、「キネマ旬報が数時間後になくなり、アサヒカメラのページが数日で抜かれる本校と比べたら夢のような話」と感想を洩らし（H04）、同年 7 月の「第二閲覧室利用中止」を伝える号の図書館ニュースには「図書館の本を無断持ち出しする事」を禁じる旨も書かれていて（N13）、遅くともこの時期には無断持ち出しが頻繁に行われていたことがわかる。

そして、おそらくはこの延滞の延長線上に、本の無断持ち出しも問題化していく。1965 年には、訪問先の跡見女子学園で本の紛失が年間 10 冊であることを聞いた生徒が、「キネマ旬報が数時間後になくなり、アサヒカメラのページが数日で抜かれる本校と比べたら夢のような話」と感想を洩らし（H04）、同年 7 月の「第二閲覧室利用中止」を伝える号の図書館ニュースには「図書館の本を無断持ち出しする事」を禁じる旨も書かれていて（N13）、遅くともこの時期には無断持ち出しが頻繁に行われていたことがわかる。

その横行ぶりは、1966 年の時点で、司書が「この蔵書、一定数までたまったらあとは毎年、何百冊か、予算のゆるす限り購入しているというのに、いっこうにふえないという変な状態にある」と、購入とはほぼ同数が持ち出されている現状を指摘し、「こういう変り種の図書室は全国でも珍しいでしょうね」と自嘲気味にあきれているほどだ（H05）。この時期の実際の配架数は定かではないが、相当数の蔵書が紛失していたのだろう。

あまりの延滞・無断持ち出しの多さに、中学図書委員会も対応した。1968 年 5 月に、雑誌がどの程度紛失していくのか、配架した翌日から調査を行ったので

ある。それによると、購入数 29 誌のうち、調査開始前(つまり配架当日中)にすでに 1 誌なくなっており、調査期間の 19 日間で 21 誌まで減少していた。つまり、配架から 20 日間で 8 誌がなくなったのである(N15)。また、この結果が発表された号では、これまでの「過去二十年間に七千三百七十七冊なくなっている」、それが「現在までの図書購入費の半分以上をしめている」「一年に三百五十七冊、一週に七冊なくなっているのです」との数字を明らかにして、それに対する生徒の意見も掲載している(N15)。筆者は、当時の学校図書館の紛失数の平均値は知らないが、常識的に考えて、上記はかなり異常な事態と言っていよい。

この調査結果が載った号で、中学図書委員会は図書館規則を一部改訂し、

- ・延滞四回で一ヶ月の貸出禁止だったものを、三回で禁止に罰則強化
- ・無断持ち出しを防ぐためのかばんの持ち込み禁止
- ・他人の個人カードを勝手に使う人を防ぐために、個人カード請求時には身分証明証を見せる

という規則強化の方針を打ち出した(高校はそのような記載はない)。しかし、その年度末には、この問題について熱心に取り組んでいただろう委員長が「対策として打ち出された『カバン持ち込み禁止』などもろくに守られていません」と嘆く通り、深刻な事態は改善されず、「生徒の自覚を待つなどという事のできない駒場では万策つくた、といった格好です」(N16)と、匙を投げざるをえない状態であった。

それでもこうした事態の改善のため、図書委員会は 1969 年から 70 年にかけて、図書館を「半閉架式」にする案を提案し、何度か検討を加えている(N16、N17、H09)。これは、いったん利用中止した第二閲覧室を再度図書館として使って、第一閲覧室を書庫、第二閲覧室を閲覧室として利用し、閲覧室は常時開放・出入り自由にするが、書庫の本を持って外に行くには必ずカウンターを経由しなければならないという案であった。本の無断持ち出しを防ぐための方法としてかなり真剣に検討されているが、その後の『図書館ニュース』を読む限り、実現された形跡はない。

こうして、1970 年の時点では、「記録によると現在、図書館には約一万九千冊の本があるとのこと。しかし実際には(6/15 調査)約一万冊しかない」(H10)という事態になってしまう。もしこの数値が正しいのであれば、新図書館の開館当時の 12000 冊よりも、むしろ減っている可能性すらあるという深刻な事態だった。

4.4 本校図書館の停滞

1960 年代初頭、本校の図書館は、本の受入冊数も順調に増え、潤沢とは言えぬまでも予算も一定水準を確保していた。また、創立 10 周年(1957 年)に PTA からの援助を受けることもできていた。1963～64 年の新図書館の完成は、本校図書館史におけるさらなる飛躍の画期になることが期待されていたはずである。

ところが、実際にはそうはならなかった。むしろ、貸出冊数は減少し、図書館の談話室化は激しくなり、延滞や無断持ち出しが目立っていく。

その状況の中、1970 年には高校『図書館報』が、72 年には中学『図書館ニュース』が、相次いで途絶する。その頃には、紙面を見ても、創刊当初のまじめな雰囲気はやや影を潜め、本校図書館や図書委員会の現状を茶化したような記事も現れていた(N20)。委員会の活動も停滞していたのだと思われる。

様々な好条件があるにもかかわらずこのような状況だった以上、やはり当時の図書館運営の失敗は認めざるを得ないところだろう。なぜ、このような失敗を招いたのだろうか。最後に簡単に考察しておきたい。

5 今日の図書館運営の視点から

5.1 図書館運営の躓きの理由

1960 年代の本校図書館運営は、どこで躓いたのだろうか。現時点からの後づけの解釈にはなるが、一般的な図書館運営の視点から、いくつか指摘できる要素はある。

(1) 購入図書の選定

すでに指摘した通り、本校図書館の蔵書は全集が中心だった。この構成は教員にとってはある程度満足のいくものであっただろうが、生徒からすると読みたい本が図書館に不足していることをも意味しただろう。生徒からのリクエストも受け付けてはいたが、購入には色々な条件が存在し、希望は通りにくかった。こうした事情から、図書館の本来の用途(貸出・閲覧)での利用率が下がり、新図書館の開館にともなう(2)の要素とあわせて談話室化していったことが考えられる。教員だけで選書をした結果生徒の実態と乖離し、図書館の機能が失われていく典型的なケースとも言えそうである。

購入図書は、教員の希望や理想を一方的に押し付け

るのではなく、生徒の実態を見ながらそれに沿ったものを選ぶ必要がある。

（２）館内のレイアウト

第二閲覧室ができ、館内は広くなった。しかし、二つの閲覧室が壁で仕切られていたため、司書の目が第二閲覧室まで行き届かなかった。このことも、談話室化や無断持ち出しの増加の一因であっただろう。図書館が広いことは好ましいに違いないが、その際のレイアウトの問題（司書からの目の行き届き易さ、機能別のゾーニング）は重要である。

（３）司書の専門性と任期

本校の司書が資格所持者であったのかどうかは不明である（ただし、筆者はおそらく司書資格を持っていなかっただろうと推測する）。しかし、一年から最長でも三年というスパンで司書が入れ替わるような状況では、本校の校風や行事を把握し、図書館運営に専門的手腕を発揮することは、到底できなかっただろう。そのせいかどうか、生徒の司書に対する扱いは非常に軽く「司書の権威はまるで尊重されず、それに対する言動はまるで下女に向っていつているようです」（H10）との苦言も教員から呈されていた。

効果的な図書館運営のためには、専門資格を持つ司書を長期にわたって安定的に確保し、生徒の信頼を得ていくことが重要である。

（４）生徒指導のあり方

延滞や無断持ち出しの多さは、図書館だけの問題とも考えにくい。おそらくこうしたマナーの問題は、当時の本校の生徒指導全般に関わっていたのではないかと思われる。

以上、いくつか考えられる点をあげてみた。そのうちの（１）～（３）は、ある程度普遍的な、学校図書館運営の基本的な留意点である。残念ながら本校図書館にはこういう点で欠けたところがあり、せつかくの新図書館も十分にはその機能を活かせず、停滞していたのではないだろうか。

5.2 これからの本校図書館運営のために

『図書館ニュース』『図書館報』が途絶して以降の本校図書館の具体的な様子はわからない。1978年6月には『本棚』という中高図書委員会合同での新たな図書館広報が発行されているようなので、機会があれば

後日調査したい²⁰。しかし、本校卒業生でもある筆者が生徒だった頃（1990～95年）を思い起こし、また、教員として着任した当時（2006年）の印象を考えても、本校図書館がその機能を十分に果たしていたとは、残念ながら考えにくい。少なくとも筆者の経験の範囲では、本校図書館は「図書館」というより、高校三年生を中心に「学習室」としてのみ使用されている状況が、長く続いていた。

その本校図書館も、今また新たな転換期を迎えている。今年度から専門資格を持つ司書を雇用できたことが大きな力となり、本校図書館は急速に改善に向かっている。（１）の蔵書構成の問題も、司書が選書の中心になることで、貸出冊数も順調に伸びてきている。

しかし、（２）図書館のレイアウトの問題はまだ整備に着手したばかりであるし、特に（３）司書の任期については、現在のところ三年間（2014年度まで）しか雇用のメドがたっておらず、今後の大きな課題となっている。

こうした問題を一つずつ解決していくことが、今後の本校図書館運営にとって重要であろう。

西暦	昭和	中1(期)	高1(期)	沿革	蔵書冊数 (目安)	貸出冊数参考値	司書・期間	学級数など
1947	22	1		5月 東京農業教育専門学校附属中学校の開校とともに図書館が設けられる。	0		なし	中学2学級(全2クラス)
1948	23	2			200		なし	(全4クラス)
1949	24	3					本杉茂子 (24.11-26.2)	(全6クラス)
1950	25	4	1	東京農業教育専門学校附属高等学校の開校にともない、図書館を中学校と共同で使用。	1500		本杉茂子 (24.11-26.2)	高校開設。普通科1学級、農業科1学級 (全8クラス)
1951	26	5	2				栗山信夫 (26.5-33.8)	(全10クラス)
1952	27	6	3	4月 校名の変更にともない、「東京教育大学附属駒場中・高等学校図書館」に改称。「図書館規定」「閲覧心得」が定められる。高校生徒会の一環として、高校図書委員会が置かれる。			栗山信夫 (26.5-33.8)	(全12クラス)
1953	28	7	4		3000		栗山信夫 (26.5-33.8)	高校に普通科一学級増(全13クラス)
1954	29	8	5		3700		栗山信夫 (26.5-33.8)	(全14クラス)
1955	30	9	6	4月 中学校校舎の改造にともない、図書館が高等学校校舎の一室に移転。	4500		古郡守充 (30.7-36.3)	(全15クラス)
1956	31	10	7	11月 駒場会より新潮文庫が寄贈。図書の貸し出しを開始。			古郡守充 (30.7-36.3)	(全15クラス)
1957	32	11	8	11月 図書館貸出がブックカード方式になる(文学書からブックカードを整備し、順次、全蔵書に及ぼす)。	6700		古郡守充 (30.7-36.3)	(全15クラス)
1958	33	12	9				古郡守充 (30.7-36.3)	(全15クラス)
1959	34	13	10				古郡守充 (30.7-36.3)	(全15クラス)
1960	35	14	11	4月 生徒会組織から高校の図書委員会が消える。			古郡守充 (30.7-36.3)	中学からの進学者で高校2学級編成。他 校より普通科1学級、農業科1学級 (全16クラス)
1961	36	15	12	12月 「図書館ニュース」(中学)第1号を発行。(ただし小澤氏の回想だと一学期末)			古郡守充 (30.7-36.4)	(全17クラス)
1962	37	16	13	4月 新入生へのオリエンテーション用に「図書館利用の手引き」を配布。 7月 校舎改築のため、3B教室に図書館を移転。 7月 「図書館ニュース」(中学)第2号を発行。 12月 「図書館ニュース」(中学)第3号を発行。 3月 「図書館ニュース」(中学)第4号を発行。	27冊(中学17冊、 高校10冊)		古郡氏の転 任により一 学期司書不 在に。辻野 栄次(31.5-)が秋より司 書兼任	農業科を廃止、普通科に転換(全18クラ ス)
1963	38	17	14	5月 新校舎(3号館)の竣工にともない、335室・336室を図書館として利用。 高校図書委員会が生徒会に復活。 7月 「図書館ニュース」(中学)第5号を発行。 12月 「図書館報」(高校)第1号を発行。 3月 「図書館ニュース」(中学)第6号を発行。 3月 「図書館報」(高校)第2号を発行。	12000 中学のみ20.1冊		鈴木耀子	(全18クラス)
1964	39	18	15	6月 5号館の竣工にともない、531室・532室も図書館として使用。 7月 「図書館ニュース」(中学)第7号を発行。 7月 「図書館報」(高校)第3号を発行。 12月 「図書館ニュース」(中学)第8号を発行。 3月 「図書館報」(高校)第4号を発行。	3月41.9冊(中学 24.4冊、高校17.5 冊) 6月 高校22冊 11月 中学17.6冊		津久居一恵 (39.4-40.9)	(全18クラス)
1965	40	19	16	7月 「図書館ニュース」(中学)第9号を発行。 9月 「図書館ニュース」(中学)第10号を発行。		7月 中学10.6冊 9月 中学14.7冊	杉山昌子 (40.9-42.9)	中学1学級増加(全19クラス)
1966	41	20	17	4月 531教室・532教室の使用を中止。 7月 「図書館ニュース」(中学)第13号を発行。 7月 「図書館報」(高校)第5号を発行。		7月 中学6.8冊	杉山昌子 (40.9-42.9)	(全20クラス)
1967	42	21	18	7月 「図書館ニュース」(中学)第14号を発行。		7月 中学12冊	八塚英子(- 45.3)	(全21クラス)
1968	43	22	19	7月 「図書館ニュース」(中学)第15号を発行。 9月 図書館規則改訂(延滞の罰則強化など) 3月 「図書館ニュース」(中学)第16号を発行。 3月 「図書館報」(高校)第8号を発行。	15613		八塚英子(- 45.3)	(全21クラス)
1969	44	23	20	7月 「図書館ニュース」(中学)第17号を発行。 3月 「図書館ニュース」(中学)第18号を発行。 3月 「図書館報」(高校)第9号を発行。			八塚英子(- 45.3)	(全21クラス)
1970	45	24	21	7月 「図書館ニュース」(中学)第19号を発行。 7月 「図書館報」(高校)第10号を発行。一以後休刊。	記録では 19000冊、 実際は約 10000冊		藤本俊子	(全21クラス)

【表1】本校図書館関連年表

年	月	中高	訪問先	蔵書数	蔵書構成	広さ	貸出	延滞への対応
1962	5	中	東京教育大学附属中学校	4100	文学、次が地理、歴史	駒場の図書室の二倍くらい		
1962	11	中	慶応義塾中学部	6000~7000 (他に教官用が4000)	文学が最多で次が地理、歴史の順。文学全集はごく少ない。		二冊一週間	
1962	10	中	立教女学院	10000	文学が一番多く、地理歴史が次、社会科学や自然科学の本も増えつつある	本校のもとの図書館の二倍ほどで非常に明るい	一週間	
1963	2	中	お茶の水女子大学付属中学校	4000~5000	文学が一番多く、辞書事典もかなりある。		一冊一週間	規則違反や書物損傷、紛失に対しては罰則があり、それ相応の処置がとられる
1963	2	中	学芸大学付属世田谷中学校	9600	我校に比べ歴史が少なく、禁帯出がわりあい多い。雑誌がほんのわずか。	あまり広くはないが明るい図書館	6日間	
1963	2	中	青山学院中部	9000	我校とあまり変わらず、やはり文学が一番多かった。目立ったのは英語事典でークラスに一冊は行き渡るように同じものがそろえてあった。			
1964	2	中	日本女子大付属中学校	20000 (教官用とあわせる)		我校と比べると一回りせまい		
1964	6	中	武蔵中学校	90000 (開架は一般書1000円以下、辞書3000円以下の本のみ)			貸出は教員のみ。	
1964	6	中	成城学園中学校	6500	我校にはあまりない探偵もの、SFなどの本が相当数あった。また、我々の学校では一般閲覧用としていない朝日新聞縮刷版なども書架にあった。	我校の約半分		
1964		中	実践女子学園中学校	10000	我校の図書館には見られないベストセラーのような図書がある。参考書も我校と比べてたくさんある。蔵書数は文学、自然科学、歴史が多く、産物が少ない。家政、手芸などに関する本は多く、機械などに関するものは少ない。	我校の図書室の一部分ぐらいの広さ	一週間、一人二冊まで。	
1965	7	中	千代田区立麹町中学校	7300 (うち生徒用6000冊、生徒1500人で、一人あたりは4冊。我校は一人あたり20冊)	文学書が圧倒的に多く、社会科、歴史、芸術が少ない	我が校の一つのホームルームの教室より少し大きいくらいで図書室(中高)の1/3~1/4くらい		返す期限を守らない者に対しての罰則もなかなか厳しいようだ。これは長期貸出し(夏休み等)に限られるが、なかなか返却しない場合は、連帯責任ということにして、未返却者のいるクラス全体の人にいったい貸し出し禁止とするそうである。
1969	6	中	青山学院中部	15000	文学が多くて全体の半分以上。新書類も多くて、岩波新書も、絶版になっている物以外は、ほとんどは持っているようでした。			
1964		高	都立駒場高校	10000		80坪(100坪の新築ができる予定)	二冊一週間	期限が切れても返さない人があるのは悩みの種
1964	6	高	お茶の水女子大付属高校	10300	新潮、角川、岩波などの文庫がよくそろっていて、これにはたいへん感心した。	駒場の第一閲覧室から司書室の部分を除いたものよりやや狭い。		一日遅れても一週間貸し出し停止
1964	6	高	青山学院高等部	16000	聖書やその注釈書が1000冊以上、全集も有名な作家のものはほとんどあった。ベストセラーと呼ばれているものや、紀行文などの種類も多かった。雑誌などは我校と比較にならぬほどいたんでいなかった。	約400平米、閲覧室だけでも150平米だからかなり広い		記述なし。
1965	2	高	立教女学院	16580	聖書・洋書がかなり目立った。雑誌は8種類。	32坪。広さはあまり広くなく、むしろ狭いほう。(中学は15坪との発言もあり)	一週間。	20日間延滞すると1日につき2円の延滞料。紛失は年間10冊くらい
1965	2	高	跡見女子学園	27000 (12000冊は研究室に行っていて、実際は生徒一人8冊程度)	60%もしくはそれ以上が文学			延滞はあまりない

【表2】本校図書委員会生徒が訪問した他校図書館の記録

新図書館展望

五月二十八日 新図書館が開館し、やっと存分に本が読めるようになった。四月開館の予定であったのが、これまでもおくれでしつづいたのは、校舎建設工事が予定より延びた事以外に、我々図書委員の怠慢も多く影響しているのでは全く申訳ないと思っている。が何れともあれ我々希望の新図書館はめでたくついに開館したのであるから、ここで新図書館について書いておこう。



図書閲覧室

まず図書館に入った時、最初になじめないと感じる諸君が大部分だろうと思う。確かに、普通教室の二倍半、図書が図書棚のびくんと読み、活用できるように充分な大きさに取ってあるはずである。閲覧室も司書室も今までの仮図書館に比べれば一倍半もあるだろうか。今迄アツク入っていた自由に変更されなかった本も今度図書館が揃ったので自由に読めるようになっている。

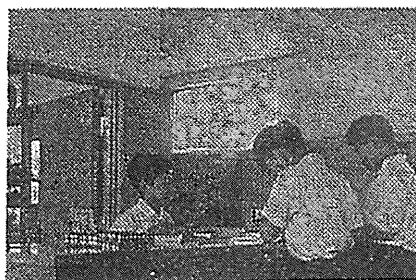
それだけでは古い。古い本を整理した後、新しい本、その後の白と淡い緑に塗られた壁、そして又全然よこれていない灰色の椅子、すっきりと淡い青色をした大きな机——何となくがさつぱりして、いて清潔な感じがするもの

この新図書館である。窓も思いやり大きくとってあって、日当たりがよくあかるい。その窓から外を見ると、本校や駒場東部のランド、本校のまわりにあるアパート、さらに校庭からでは見られぬいせの向うまでがはっきりと見える。壁の上に上れば、なつてい

る今の状態で、自由に出入りでき、高所からの景色を充分に眺めることの出来るのも、この新図書館にだけはあったろうか。それに、景色を眺めずして目が痛くなったり、疲れたりした人のためには、ソファが二つおいてあるし、ソファの前にある水置では本を洗う人に手を洗ってもらう。全くよく整っている図書館である。が、畏れあるものには、短所がいくつかついているもので、この図書館もその例外ではない。で、我々中学生にとって

の唯一の欠点は、この図書館が、新校舎三階に位置しているという事である。昇降口でスリッパにはきかえ、階段を三つ上って図書室に入る。降りには階段を三つ下がつて、昇降口で靴にはきかえる。まったく面倒くさい事ではあるが、がまんしてもらうよりしょう

カウンター風景



うがよい。

いや、もっとも諸君の旺盛な読書欲にあつてはこんなことは問題にもならなにかも知れたいが、

去年三月には、東に校舎が続き、もう一階図書館が

できるはずである。

そうすれば、図書館中高にわかれ、とらうん、どちらにも入れる。今よりもっとゆつたりと読書を楽しめるようになる。

が、このように、ますます本々、大きく立派になつていく図書館にも、新しいために、雰囲気というものが無い。

これは、我々図書委員が作るものでもなければ、本のように金で買えるものでもない。

我々生徒自身で作れば、育ててゆくものである。図書館づくりは、これからである。

駒場のほこりである図書館に、駒場らしい新鮮な館風を育て、ほんとうの意味での駒場の自慢となるような図書館を築りあげようではないか。

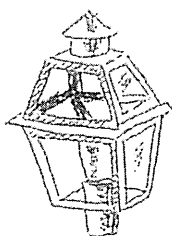


図4 「新図書館展望」(N05、2 ページ)

【注釈・引用文献】

1. 鈴木文子（1987）『創立 40 周年記念誌』、P115。
2. 筑波大学附属駒場中・高等学校図書館（1986）『図書館案内 昭和 61 年度』、P1。
3. 本校では筑波大学移管（1978 年）以降、昨年度まで司書資格のない事務職員が図書館を担当していたので、この時期も同様だった可能性が高い。一方で、小澤正晴「図書室回想」（『創立 30 周年記念誌』、P66）によると、当時の司書はいずれも「若い女性」で、同僚の坂根義久氏の世話による「国学院大学の卒業生」ということなので、大学で図書取り扱いについての専門的訓練を受けていた可能性も否定できない。
4. 全国学校図書館協議会（1960）「司書教諭と学校司書の実態」『学校図書館』第 121 号、P8-44、全国学校図書館協議会。
5. 長岡光郎（1966）「最近の日本文学全集」『学校図書館』第 186 号、P8-13、全国学校図書館協議会。
6. 毎日新聞社編集部（1977）『読書世論調査 30 年』、P27-40 より集計。
7. 渡辺守順（1961）「高校の読書調査とその診断」『学校図書館』第 133 号、P40、全国学校図書館協議会。ちなみに、本校では 1960～61 年に中学生を対象に「夏休みに読んだ本」の調査が行われ、そこでの上位は 60 年が『次郎物語』『坊っちゃん』『吾輩は猫である』、61 年が『次郎物語』『ジャン・クリストフ』『破戒』であった。
8. 武田梅男（1961）「高等学校図書館と基本雑誌」『学校図書館』第 129 号、P16、全国学校図書館協議会。ちなみにこの調査によると、当時の東京都の私立校 125 校の平均蔵書数は 7413 冊であった。また、この記事では、1959 年の全国私学教育研究会での私学図書館協議会の研究発表として、一校約 30 種の雑誌を購入し、20 種を生徒向けとすることが提案されている。それを考えても、本校の 40 誌という雑誌購読数は多いと思われる。
9. 前掲『図書館案内 昭和 61 年度』、P1。
10. 小澤正晴「図書室回想」（1977）『創立 30 周年記念誌』、P66。
11. この工事期間中、従来の図書館を取り壊さねばならなかったもので、1962 年 7 月から、図書館は一時的に 3 B の教室に移転した（N02）。そこでは「利用度の高い本のみ配架し、多くは縛ったまま積み上げ」た状況のままだったということである（小澤正晴「高校図書館の歩み」、H01）。
12. 現在、本校図書館は 1988 年に竣工した 7 号館内の「自学自習センター」内に移転しており（図書スペースと通称されている）、1963 年時点の「新図書館」があった場所は、別の目的に使用されている。現在では、生徒会室や文実本部があるエリアの「旧中図」（「旧中学図書室」の意味）という通称や、LL 教室の隣りに残っている書庫に、当時の痕跡が残っている。
13. 写真入りの記事は『図書館ニュース』初であり、第 5 号「後記」でもそのことに誇らしげに触れているが、翌 6 号では予算配分の失敗と反省されている。
14. 以下、本校図書館の広さの数値は前掲『図書館案内 昭和 61 年度』による。
15. 前掲「司書教諭と学校司書の実態」『学校図書館』第 121 号、P12。
16. 全国学校図書館協議会（1956）『学校図書館の設備と設計』には多くの学校図書館の見取り図が掲載されているが、大閲覧机を囲むように壁際に書架を配置する構図は、そこでもよく見られる。また『図書館ニュース』には、図書委員会が訪問した学校図書館の見取り図が載っている場合もあるが（N02、N03、N04、N06）、それを見ても、似たり寄ったりの配置である。
17. 図書館での談話それ自体は、現在の学校図書館をめぐる文脈では、必ずしも悪いこととは考えられていない。むしろ、気軽な会話は相互の触発的な創造を生み出す契機として捉えられ、それができる空間としてのラーニングコモンズは、図書館の中でも必須の機能として認識されつつある。現在そこで問題なのは空間の適切なゾーニングであって、談話室化を防ぐことではない。ただ、1960 年代は、「図書館は静かな空間であるべき」という通念が支配的な時代であった。本校の「第一閲覧室を読書室、第二閲覧室を学習室に」という機能分化方針も、「せめて第二閲覧室だけは本来の図書館の姿である静かな空間に」という意識だったものと推測される。
18. 前掲『図書館案内 昭和 61 年度』、P1。
19. その後の第二閲覧室についての詳細は不明だが、1967 年頃には、この部屋は視聴覚室として使われていたようだ（N14）。1968 年には盗難を防ぐ目的で再び閲覧室として使用する計画もあったようだが（N16、H08）、どうもそれは実現しなかったようである。1972 年の『図書館ニュース』には、「中学図書室というのが開店休業状態で、たまに開催される父兄会と、一年一回の演劇部の公演のためにあるような状態」（N20）だったという記述がある。
20. 前掲『図書館案内 昭和 61 年度』、P2。